

教育実践論文

知的障害特別支援学校中学部の生徒に対する 「電話で話そう」の単元を通して 「聞く力・話す力」を育てる国語科の授業

黒木 美帆* ・ 小野 真智子* ・ 大島 美和子* ・ 松山 郁夫**

Japanese Language Classes to Improve of Speaking Skills in Learning Units through
"Let's Talk on the Telephone" for Students with Intellectual Disabilities
at a Special Needs Junior High School

Miho KUROKI*, Machiko ONO*, Miwako OSHIMA*,
and Ikuo MATSUYAMA**

【要約】

本研究では「電話で話そう」の国語科の単元を通して、知的障害特別支援学校中学部の生徒が意欲的に取り組める国語の授業の在り方や、「聞く力・話す力」を育む支援の在り方を検討した。定型の言い方を知り、見えない相手に話すという学習で対象グループの全生徒が電話に親しみ、それぞれの話す力を身に付けることができた。生徒の興味や関心や得意なことを見つけ、それらを授業の中に落とし込み、人間関係の交流を通して相手と会話をする楽しさを体験させる必要性等が考察された。

【キーワード】

知的障害特別支援学校中学部の生徒、「電話で話そう」の単元、話す力を育てる国語科の授業、「聞く力・話す力」を育む支援

1. 問題提起

佐賀大学教育学部附属特別支援学校中学部の国語科の指導については、教科別の指導として週に2時間の授業と、各教科等を合わせた指導の中で取り扱っている。教科別の指導の週2時間の国語は、生徒の実態ごとに3つのグループA～Cを編成し授業を行っている。本研究の対象である国語Bのグループでは、特に日常生活を送る上で必要だと考える「聞くこと・話すこと」に重点を置いて年間を通して指導している。

今年度は4月からの「すごろくで自己紹介をしよう」や「お話を聞こう」の取り組みを経て、対面における「聞く力・話す力」は年度当初から少しずつ伸びてきたことが窺える。今回の「電話で話そう」の単元での学習も、その「聞くこと・話すこと」の一環であり、特に「話すこと」に重点を当てて設定した。電話の受け答えについては特別支援学校学習指導要領に国語科の小学部3段階と中学部1段階の内容として示されており、実生活でも必要となる力である。しかし、電話を使った経験がほとんどない生徒が、目の前にいない人を想起しながら話すことは、かなり難しいことであろうと予想される。

しかしながら、「知的障害や自閉スペクトラム症のある生徒には、その特性からソーシャルスキルトレーニング(SST)を取り入れ、対人関係の向上を目指す取り組みを重視すべき(中島, 2019)」との主張もある。このため、本単元で将来の実生活で生徒が電話を使った受け答えができるようになることをねらって、効果的な授業を行っていくためには、本グループの生徒が意欲的に興味をもって取り組める工夫

*佐賀大学教育学部附属特別支援学校

**佐賀大学教育学部 1

を行い、一人ひとりの力を伸ばすための手立てを考えていかなければならないと考える。この「電話で話そう」の取り組みを通して、生徒が意欲的に取り組める国語の授業の在り方や、「聞く力・話す力」を育む支援の在り方について検討していきたい。

その際、「知的障害や自閉スペクトラム症等への療育や教育において、人間関係の相互作用、依存関係を軽視、または念頭に置かない自立の強要の問題が存在する。適応を順応に置き換えた被援助者の社会適応に関する問題がある。適応の意味は個人が能動的に社会・環境に働きかけ、その社会・環境を自らに適合させる働きである。そのため、人間関係の相互作用、依存関係を積極的に採用し、現実課題に向けられた生徒の態度の焦点を当て、その自主性、自発性を重視すべき（石井, 1990）」と指摘されていることも踏まえておかなければならない。つまり、特別支援学校の教師には、児童生徒の立場に立った人間観・教育観が不可欠と言える。本研究においても、これらのことを念頭に置いて、生徒の教育に取り組むことにした。

なお、倫理的配慮として、研究対象の生徒の保護者には、事前に研究校としての取り組みに協力をいただくことの下承を得ており、論文での記載については個人が特定されることのないようにした。

2. 実践目的

以上より、本研究の目的を、「電話で話そう」の国語科の単元を通して、生徒が意欲的に取り組める国語の授業の在り方や、「聞く力・話す力」を育む支援の在り方を明らかにすることとする。

3. 実践内容

(1) 単元について

私たちの身の回りには、自宅の固定電話や公衆電話、また、携帯電話の普及によって外出先でも通話ができるなど、電話を身近に感じる場面が多い。一人一台以上の携帯電話を持ち、今後は大人だけに限らず中学生・高校生の携帯電話所持が当然となることだろう。そういった世の中の流れから、いつでも、どこでも、誰かと電話で通話をするということは、生活を送る中で必要な力になると考える。また、「電話もしくは携帯電話の利用は、障害児者が保護者との間で情報共有することで、彼らが地域社会で安全に生活する機会を保障するだけでなく（井上, 1994）、より積極的な社会参加を可能にする支援ツール（濃添, 2002）として有効であると考えられる。（福永ら, 2005）」と主張されている。したがって、生徒の将来における自立と社会参加の観点からも、獲得したい力であると考えられる。

電話での通話に関しては、特別支援学校学習指導要領国語科の内容として、小学部3段階において「A 聞くこと・話すこと」の項目の、「エ 挨拶や電話の受け答えなど、決まった言い方を使うこと。」として示されている。電話での通話には「もしもし。」や「今電話していいですか。」など、決まった言い方があり、「話すこと」の学習において、生徒にとって取りかかりやすい活動であり、国語科の内容の「A 聞くこと・話すこと」の「オ 相手に伝わるよう、発声や声の大きさに気を付けること」にも合わせて取り組むことができる。

本グループは、3年生男子生徒A、生徒B、生徒Cと、1年生女子生徒D、生徒E、生徒Fで編成されている。6名共、概ね小学部3段階の学習の程度にあると捉えている。本グループの生徒は教師の手本に続いて復唱したり、話すことをワークシートにまとめたりする活動に集中して取り組むなど、「話すこと」の学習に積極的に取り組むことができている。今年度の前期には、「すぐろくで自己紹介しよう」の単元に取り組み、相手に伝わる話し方の学習を行った。その結果、「ゆっくり話すこと」、「適切な声の大きさ」、「正しい姿勢」に気をつけながら練習に取り組み、他の生徒の前で発表することができた。発声して発表することが難しい生徒Fも、画用紙に自分の考えを書いておき、質問に答えるタイミングでみ

んなに提示するという方法で、意欲的に参加することができた。このように、これまで「話すこと」については、教師の質問に答えたり、教師と一緒に発声したりして対面で話す学習には多く取り組んできた。しかしながら、電話を使って対面しない相手と話すことは未学習である。また、相手に伝わりやすい話し方についても引き続き取り組んで定着を図る必要があると判断される。

(2) 指導の計画

①単元構成

「電話の受け答え」の内容については、文部科学省著作の特別支援学校小学部国語科教科書（以下こくご☆☆☆）にある単元「電話で話す」として示されている。本単元では、こくご☆☆☆で示されたものを、グループの生徒の実態を考慮し、生徒に馴染みがあり実際の生活で使い得る携帯電話で行うように組み直して展開することとした。まず、「どういう場面で電話を使って伝えるか」や、「相手に伝わりやすい適切な話し方」などを確認しながらワークシート作成し、次にそのワークシートを確認しながら、話して練習する場面を多数設定した。また、援助要求を行う3つの場面を設定した。作成したワークシートを確認し、教師と一緒に練習し、実際に通信機器を用いてみんなの前で発表するという活動を、その3つの場面ごとに同じ流れで行うようにした。同じ流れで行うことにより、生徒が見通しをもてるようになり、活動にスムーズに取り組むことができると考えた。「電話で話そう」の単元を通して、場面を想定した台詞のワークシートを手がかりに、その場にはいない相手にも分かりやすく話して伝えようとする力を育むことをねらった。

表1 単元の計画

| 次 | 時 | 日 | 学習活動 |
|-----|---|-------------------------|---|
| 1 | 3 | 10/7 10/8 10/9 | 電話のことや電話での丁寧な話し方を知る。 |
| 2 | 2 | 10/14 10/16 | 話すことをワークシートにまとめる。 |
| 3ー① | 9 | 10/21 10/23 10/28 | 電話で話す練習をする。①【スーパー】 1. ワークシートの確認、練習 2. 電話を使った練習 3. 発表 |
| 3ー② | | 11/4 11/6 11/11 | 電話で話す練習をする。②【忘れ物】 1. ワークシートの確認、練習 2. 電話を使った練習 3. 発表 |
| 3ー③ | | 11/13 11/18 11/20 | 電話で話す練習をする。③【お迎え】 1. ワークシートの確認、練習 2. 電話を使った練習 3. 発表 |

②教材について

教材については、生徒の興味関心を引き出すことに重点をおいて準備することとした。実際に生徒の生活の中であり得る①スーパーでお菓子を買いたい時、②学校に来て家に忘れ物をした時、③学校の授業が終わって迎えに来てほしい時、という3つの場面で、すべて家族（母）に援助要求の内容で連絡をする設定とした。それぞれの場面を1枚のイラストのスライドで表し、話す練習をする時や発表する時は、電子黒板でそのスライドを示しておくようにした（図1）。2次の学習では、3次で実際に電話で話す練習を行う際に使用するワークシート（図2）作りに取り組んだ。ワークシートは携帯電話でよく見る「LINE®」と同じ横書きとした。1枚で見通せるようにA3の大きさとし、「私」が伝える言葉を左の吹き出しでピンクの色を付けて用意し、生徒がそれぞれ伝えるべきことを記入するようにした。また、右の吹き出しには通話相手の「おかあさん」が話す会話を提示したものを記入しておき、生徒がどのタイミングでどの部分を読めばよいか分かりやすいようにした。

3次の実際に話す練習の時は、使用できない携帯電話（図3）を教材の一つとして準備し、携帯電話を使用している実感がもちやすいようにした。3次の3-①②③のそれぞれの発表の授業では、タブレット端末（図4）の通話の機能を用いて、その場にはいない母親役の教師と実際に電話の受け答えを行うようにした。



図1 場面設定を知らせるスライド

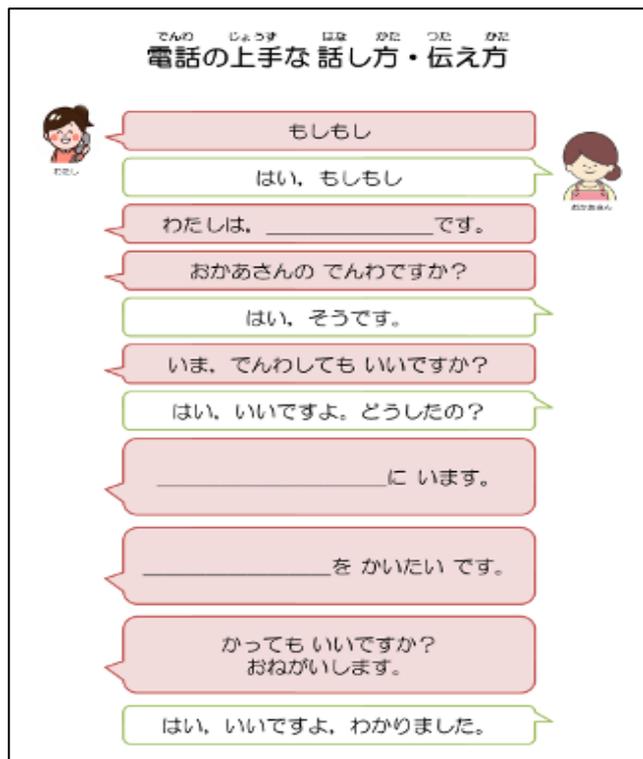


図2 ワークシート



図3 携帯電話



図4 タブレット端末とアプリ

③本単元における生徒の実態と単元の個人目標

本単元における生徒の実態と目標は表2の通りである。ワークシートを読むことを通して、電話の受け答えの練習に取り組む単元であるので、読むことについての実態や話すことについての実態を詳しく調べた。それを踏まえて、単元で身に付けて欲しい力を単元の個人目標として設定した(表2)。なお、この表のうち生徒Aは10月中入院しており、単元の途中から授業に参加することになった。

表2 生徒の実態

| | 実態 | 目標 |
|-----|---|---|
| 生徒A | 本単元時(10月中)は入院しており、第3次から部分的に授業に参加した。 | 電話対応で、自分の状況が相手にわかるようにワークシートを活用して話すことができる。(小学部3段階) |
| 生徒B | 発表やワークシート記入などに対して積極的に取り組む。間違えた時にも前向きに捉えて正すことができる。読み飛ばしをすることがあり、一文ずつ確認をして読むよう指導する必要がある。 | 電話対応で、自分の状況が相手にわかるように適切に話すことができる。(小学部3段階) |
| 生徒C | 答えることに自信が少なく、発表時は声が小さくなったり答えるまでに時間がかかったりすることがある。毎時間取り組む活動には慣れてきて、発表にも少しずつ積極的に取り組めるようになってきた。 | 電話対応で、自分の状況が相手にわかるようにワークシートを活用して話すことができる。(小学部3段階) |

| | | |
|-----|---|---|
| 生徒D | 文字を書いたり読んだりすることに困難を感じていて、集中して取り組める時間が少ない。飛ばし読みをすることがある。 | 電話対応で、自分の状況が相手にわかるようにワークシートを活用して話すことができる。(小学部3段階) |
| 生徒E | 質問や問題に答える際は、教師が提示する選択肢を読んで答える。また、毎時間取り組んでいる活動は、流れがわかることで主体的に取り組むことができている。 | 決まった相手との電話を想定し、決まった言い方を使うことができる。(小学部3段階) |
| 生徒F | 場面性緘黙があり、声を発することが難しい。少しずつグループ内の他の生徒と一緒に学習することに慣れてきている。また、発表はワークシートに記入したものを教師が読んだり、画用紙に大きく書いたものを他の生徒に見せたりすることで発表としている。 | 自分の状況が相手にわかるように、順序を考えて伝えることができる。(中学部1段階) |

(3) 指導の実際

指導の実際として、2回の授業を取り上げた。生徒の様子や生徒の変容については次のとおりであった。

① 10月23日の取り組み

本授業は全14時間中の7時間目の授業にあたり、単元の計画では3-①次の2「電話を使った練習」のスーパーで買いたいお菓子について電話する練習をするという活動内容であった。本時の目標は「電話で、スーパーで買いたい物を伝えることができる。」と設定した。授業では1.「言葉探し」、2.「電話で話そう」の練習、3.「今日のお話」の聞き取り、の3つの活動に取り組んだ。

1.「言葉探し」は、今年度の国語Bグループの学習において、言葉に慣れ親しむ活動として通年で取り組んでいる。五十音の中から一文字を選び、その文字から始まる言葉を5分程度の時間でより多く書き出し、それらを発表する時間を設けている。語彙を増やすことを目的としつつも、挙手や返事の仕方、発表の仕方について学ぶこともねらいながら学習を進めている。また、授業の中心となる活動への動機づけを高めるウォーミングアップにもなっている。

授業の中心となる2.「電話で話そう」の練習では、前次で記入したワークシートを見ながら、実際に携帯電話とお菓子の箱を持って対話する練習を行った。教師と一対一で話す練習を重ねる時間と、生徒Fがチャット機能で対話するコメントごとにチャットで送信をする練習を行う時間を設定した。2.「電話で話そう」の活動内では、初めに「スーパーでお菓子を買いたい時」の場面の確認を電子黒板やワークシートを見ながら行い、次にワークシートを見ながら個人で会話の練習を行った。練習後に、T1の教師と対面の会話の形式で練習の成果を発表した。この活動の中では、A3に印刷した会話のワークシート、タブレット端末、タブレット端末内にダウンロードしたTeamsアプリ、お菓子の空き箱、電源の入らないスマートフォンまたは携帯電話、を教材教具として使用した。タブレット端末のTeamsアプリは、口頭発表が難しい生徒の連絡手段としてのチャット機能を使用した。電源の入らないスマートフォンまたは携帯電話は、「耳に当てて話す。」「会話の始めから終わりまで顔の横に持つておく。」など、電話の使い方を学習するツールとして取り入れた。

3.「今日のお話」の聞き取りは、「言葉さがし」と同様に通年で取り組んでいる。3~5分からなる童話を聞いてワークシートの問題に取り組んだ。「今日のお話」のワークシートは習熟度別に三種類を用意

し、答えを記入するときは、教師が答えの選択肢を用意したり問題を生徒と一緒に読み上げたりして答えを書けるようにした。

本時の個人目標は表3のとおりである。

表3 10月23日の授業における個人目標

| 生徒 | 本時の個人目標 |
|-----|--|
| 生徒B | 電話対応で、スーパーで買いたいお菓子を、相手に分かるように話すことができる。 |
| 生徒C | 電話対応で、スーパーで買いたいお菓子を、ワークシートを見ながら話すことができる。 |
| 生徒D | 電話対応で、スーパーで買いたいお菓子を、ワークシートを見ながら話すことができる。 |
| 生徒E | お母さんとの電話を想定し、スーパーで買いたいお菓子を、決まった言い方で伝えることができる。 |
| 生徒F | 電話対応で、スーパーで買いたいお菓子が相手に分かるように、チャット機能を使って相手に伝えることができる。 |

電話を持って練習するのは2回目ということもあり、どの生徒も意欲的に取り組む様子が見られた。生徒Bは決まった言い方を覚えて言えると予想したが、ワークシートを見ながらでも間違える場面があった。本時の個人目標は未達成であると評価した(図9)。生徒Cは1人でワークシートを見ながら、相手と適切に話すことができた。個人目標は達成できたと評価した(図5)。生徒Dは練習ではT2の教師の指さしの支援が必要だったが、発表は指さしの支援も少なく1人でワークシートを見ながら発表できる部分も出てきた。個人目標は未達成であると評価した(図8)。生徒EはT2の教師の指さしをたよりに、ワークシートに書いてある決まった言い方ができた(図7)。個人目標は達成できたと評価した。生徒Fはチャット機能を使って積極的に練習ができた。また、1つずつメッセージを区切って送信することができた。個人目標は達成できたと評価した(図6)。



図5 生徒C生徒B 練習の様子



図6 生徒F練習の様子



図7 生徒E発表の様子



図8 生徒D発表の様子



図9 生徒B発表の様子

② 11月11日の取り組み

本授業は全14時間中の11時間目の授業にあたり、3-②次の学校で筆箱を忘れたことについて電話する発表の授業を取り上げる。学習の展開は①の10月23日の取り組みと同じ流れで行った。授業の中心の活動となる2.「電話で話そう」の練習では、前時(11月6日)の授業での「電話を使った練習」から続く「発表」の活動となった。本時では、それぞれの生徒が実際にタブレット端末で通話できるようにして、対面していない相手と電話の対応をする活動を行った。授業を行うにあたって、以下の点(表4)について授業改善を行った。本時の個人目標は表5のとおりである。

表4 10月23日の授業から11月11日の授業に向けての改善点

| 改善点 | 目的 |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 練習方法の変更。ワークシートをそれぞれ読んで練習する時間を、教師の手本を聞いて復唱して繰り返す練習に変更した。 | <p>目で見て読むだけでなく、耳で聞いて復唱することにより、「適切な声の大きさ」、「間の取り方」など「相手に伝わるような話し方」についての具体的な仕方を知ることができる。定型の言い方について耳で聞いて覚えることができる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> チームティーチングとして、T1の教師が教室を離れ電話応答するのではなく、教室に残って生徒の指導を行い、T2の教師が電話対応をすることとした。 | <p>前回の生徒の一人一人の様子を基に、発表の前に気をつけることを伝えたり、必要な指差し等を行ったりして個別の支援を行うことができる。発表の後によかった点などをクラス全員に伝え、認め合う雰囲気を作ることができる。</p> |
| <ul style="list-style-type: none"> 生徒Fの発表方法について、電話応答している様子を他の生徒は近づいて発表を見守るようにした。 | <p>これまでの取り組みの中で、生徒Fが安心して活動している様子が見られたことを前提としている。他の生徒にも生徒Fの努力している様子を知らせることができる。生徒Fもみんなに自分の活動の様子を見てもらうことで、自信を高めることができる。</p> |

表5 11月11日の授業における個人目標

| | |
|-----|--|
| 生徒 | 本時の個人目標 |
| 生徒B | 電話対応で、筆箱を忘れて来たことを、ワークシートを見ながら話すことができる。 |
| 生徒C | 電話対応で、筆箱を忘れて来たことを、相手にわかるように話すことができる。 |
| 生徒D | 電話対応で、筆箱を忘れて来たことを、ワークシートを見ながら話すことができる。 |
| 生徒E | お母さんとの電話を想定し、筆箱を忘れて来たことを、決まった言い方で伝えることができる。 |
| 生徒F | 電話対応で、筆箱を忘れて来たことが相手に分かるように、チャット機能を使って相手に伝えることができる。 |

5名共、電話を持ちながら話すことにも慣れ、教師の促しがなくても自分から通話を開始したり、順番になったら自分からタブレット端末を受け取ったりする様子が見られた。練習の仕方を、個人練習から全体練習に変えたことで、ワークシートを正確に読むことが難しい生徒も周りの生徒と一緒に、教師の手本に続いて話すことができた(図6)。

どの生徒も、対面していない相手と一人で話すことを楽しみながら発表することができ、また、友達の発表もよく聞くことができていた。生徒Bは、ワークシートを一人で読みながら話すことができ、言い間違えたときも自分で気付いて言い直す様子があったため、本時の目標を達成したと評価した(図11)。生徒Cは、ワークシートを一人で見ながらしっかりと携帯電話を耳元につけて、ゆっくりはっきり話そうとする様子が見られたため、目標を達成したと評価した(図12)。生徒Dは、発表をするまではそわそわとした様子だったが、タブレット端末を受け取り、携帯電話を手にする時、時々ワークシートを自分で指さして確認し、順番通り読むことにも注意しながら発表することができていたため、目標を達成したと評価した(図13)。生徒Eは、第3次①の発表場面ではタブレット端末を用いて電話することに拒否を示して発表をすることが難しかった。本時は、順番を事前に伝えたり、友達の発表を近くで見るなどの活動を取り入れたりするなど、より見通しがもちやすいような支援を行ったことで、タブレット端末から音が出ていることにも少しずつ慣れ、笑顔で電話をすることができた。また、練習の時間は、ワークシートを前のめりになって読む意欲的な様子が見られ、目標を達成したと評価した(図14)。生徒Fは、発表順を決める際に、これまでなら教師に促された順番で発表をしていたが、本時の発表順を決める場面では自分から4番目に手を挙げるすることができた。発表に対して意欲的であることが伺えた。また、チャット機能を使って発表している時に、他の生徒がタブレット端末の画面を見るために近づいて「すごいね。」と言葉をかけたが、注目されていても緊張する様子はなく、落ち着いて発表することができていた(図15)。「チャット機能を使うことができた。」というだけでなく、文字打ちの候補に出てきたものから適切な言葉を選んだり、知っている漢字を変換したりして、より相手に伝わりやすい方法で表現することができていたため、目標を達成したと評価した。



図 10 全員で練習をしている様子



図 11 生徒B発表の様子



図 12 生徒C発表の様子



図 13 生徒D発表の様子



図 14 生徒E発表の様子



図 15 生徒F発表の様子

4. 実践結果

生徒Aについては、本単元に参加することが難しかったので、評価を行っていない。自分の興味のあることを教師に伝えることを好んでいるので、今後、生徒の興味・関心を取り入れて「聞くこと・話すこと」の学習を計画していきたいと考える。生徒Bについては、ワークシート中の「もしもし」「お母さんの電話ですか。」など定型の話し方についてほとんど覚え、ワークシートを確認はするものの、拾い読みではなく、滑らかに適切な声の大きさやスピードで話すことができるようになった。また、友達の発表を集中して聞く様子が見られ、「すごいね。」などの賞賛のつぶやきをする様子が見られた。生徒Cについては、この取り組みの早い段階から、定型の言い方を覚えて正しく言うことができていた。また、使う道具を自分から取りに行くなど意欲的に取り組む様子も見られた。授業を積み重ねるごとに、適切に間を設けるなど、相手に伝わりやすいように「ゆっくり、はっきり」話そうとする姿が見られるようになった。生徒Dについては、話すこと自体は積極的にできるものの、字を読むことが難しいため、はじめは定型であっても自信をもって大きな声で話すことは難しかった。教師の後に続いて話す練習を繰り返したところ、目で見て読むだけでなく耳で聞いて覚えたことで、大きな声ではっきりと発表することができるようになった。生徒Eについては、ワークシートを読むことは初めから正しくできていたが、はじめてタブレット端末での通話を行った時は、予想していない待機音が聞こえたり、その場にいない教師の声が聞こえたりすることに、強い拒否を表した。しかし、事前に友達が発表の中で通話する様子を見たり、教師の説明を聞いたりして見通しをもつことができ、3次-②からの取り組みでは、落ち着いてタブレット端末を用いた通話をすることができた。生徒Fについてはこれまでの国語Bグループの学習の中で、自分なりの方法で表現することができていたが、本単元においてもチャット機能を用いてみんなの前で表現することができた。自信を深めた結果として、自分から手を上げて発表したい気持ち

を表出できたのではないかと考える。

本単元「電話で話そう」では、定型の言い方を知り、見えない相手に話すという学習で、全生徒が電話に親しみ、それぞれの話す力を身に付けることができたと言える。しかし、実生活の中で電話での通話ができ、生活の中で生かせるようになるには、「聞くこと・話すこと」の国語の力をさらに高めるとともに、実際にいろいろな場面で電話を使う学習に取り組んだり、家庭生活の中でも経験を積んだりするなど、今後も電話で話すことに生活全般において継続的に取り組む必要があると考えられる。

5. 考 察

本研究は、「電話で話そう」の国語科の単元を通して、生徒が意欲的に取り組める国語の授業の在り方や、「聞く力・話す力」を育む支援の在り方を明らかにすることを目的として行った。

まず、生徒が意欲的に取り組める授業の在り方について考察していきたい。本取り組みにおいては、どの生徒も課題に対して、集中して練習に取り組む、発表も積極的に行っていた。また、他の生徒の発表にも耳を傾ける様子が見られた。このため、概ね生徒が意欲的に取り組むことができたと評価される。3つの援助要求の場面設定は、生徒にとって分かりやすいものであったと考える。後日自分の筆箱が見当たらないことに気づいた生徒Bが、「もしもし、今学校にいます。」と電話の通話を再現すると、生徒C、Dが「それ、『筆箱忘れた』だね。」と楽しくおしゃべりし合う様子が見られた。自分の生活に関係する学習であると生徒が認識でき、興味や関心をもったことで、意欲を喚起することができたのではないかと考えられる。実際の携帯電話を持って話したり、通話の機能を活用したりしたことも、生徒の興味を引き、意欲的に活動できた要因と言える。これまで家族が携帯電話で通話する様子を見てきており、自分も同様に通話できることが実感できたため、嬉しそうな表情を示したのだと推察される。

今後さらに、「実際の生活でも電話を使ってみよう」と生徒の意欲が芽生えるようにするためには、電話での通話の学習において、自分で考えて話す部分を増やしていくことが求められる。自分で考えて話す部分は、一人ひとりの興味・関心に沿ったものであれば、なお意欲を喚起できよう。また、本単元では、繰り返し練習を行ったり発表を行ったりする中で、一人ひとりに応じた支援を行ってきた。そのことにより、集団におけるコミュニケーションの場の中で、みんなの前で自信をもって発表することができるようになり、教師のみならず同じグループの生徒にも賞賛をうけたことで、「次もしたい。」という意欲が高まったものと考えられる。「交流の場が集団におけるコミュニケーションの場として機能すると、生徒同士の交流を促し、楽しく活動できるようになる。人とかかわる楽しさを共有する経験を積み重ねることによって成長を促す（山谷, 2007）」と言及されている。したがって、生徒が意欲的に取り組める授業が展開できたものと判断される。

次に、「聞く力・話す力」を育む支援の在り方について考察していきたい。電話の受け答えは、一方的に話す（今回はワークシートを読む）では成り立たず、自分が言ったことを相手が聞き取り、相手が言ってから次の発言をするという「やり、とり」の力が必要となってくる。今回の取り組みでは、ワークシートで、自分のセリフと相手（母親）のセリフの違いが分かりやすいように色等を変えて表しており、練習時に指で指しながら、時系列にセリフが進んでいくことを確認することができた。また、実際の通話では、「相手が聞き取れないと、応答がない。」という場面があり、「伝わるように話そう」という生徒の気づきを導くこともできた。今回は定型の話し方で、話す内容も決まっていたので、順番や「ゆっくりはっきり話す」話し方だけに気を付ければよかった。今後、相手の話す内容を聞き取って理解し、その内容に応じた答えとなる言葉を想起して話すという力の育成が求められる。そのためには、「何についての話なのか。」状況からもヒントを得やすく、「自分の話したことが相手に伝わったのか。」についてのフィードバックが分かりやすい、対面での「聞くこと・話すこと」の学習に取り組んでいくことも重視

すべきであろう。現在、毎回の授業で「短い話を聞き取り、その話についての短い質問（プリント）を読んで、答えを記入する。」という活動に取り組んでいる。そのため、生徒には集中して教師の話の聞き取りをする態度が育ってきている。しかし、質問を理解し、答えることができるかという点については、個人差が大きいところである。一人ひとりの実態や、理解の仕方に応じた支援をしながら、「相手の言うことを聞き取って理解し、答える力」を育てていかなければならない。

国語の言葉による「聞くこと・話すこと」の資質・能力を育成するためには、その前提として、生徒の言語性・非言語性に関わらないコミュニケーション力や、社会性の育成にも視点を置かなければならない。その際、「ストレングス（強み）視点による支援においては、人と環境の相互作用をふまえた広い視点で利用者を理解した働きかけ、および利用者と同じ目線で利用者の持つ可能性を信頼して働きかけることが重視されている（Salee Bey, 2002）。」「知的障害や自閉スペクトラム症等を有する児童生徒の興味や関心等のストレングス（強み）に着目しそれを伸ばしていくことで、苦手と感じている側面も改善していく（林田・松山, 2019）。」「他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく方法をとる場合に、ストレングス視点からのアプローチが成り立ち、対人交流や相互作用を重視するため社会性を高めることに繋がる（松山, 2018）。」と指摘されていることを踏まえなくてはならない。また、「自らが他者の心的状態を推し量り、自らの行動が他者の心理状態に与える影響を考慮し、行動を微修正しつつ対人関係を調整できる共感能力を育てる必要がある。行動を誘発する環境因よりも他者の表情や態度に目を向け、そこで生起している他者の情動変化に対する内省力を育てることを重視すべき（遠矢・針塚, 2011）。」との論及にも目を向けたい。つまり、生徒の「聞くこと・話すこと」の資質・能力を育成するためには、生徒の興味や関心や得意なことを見つけ、それらを授業の中に落とし込むことや、人間関係の交流を通して、相手と会話をする楽しさを体験させる取り組みが必要であり、共感能力や内省力を高めることも大切にしなければならないと考える。

今後は、国語科の授業として「聞く力・話す力」の育成に努め、生徒のコミュニケーション力や社会性について学校生活全般で指導・支援を行って行かなければならない。さらに、生徒の積極的な社会参加を目指し、「生徒が携帯電話などの通信のためのツールを使うことができるようになる」ための指導の可能性も探っていきたい。その際、実物の携帯電話等の通信機器を使う経験が重要になってくると考える。携帯電話を初めとする通信機器の確保と、有効な授業計画を行っていかなければならない。学校教育においては、今回のように国語の授業として単元を計画したり、生活単元学習などで外出先から電話をかける活動を仕組んだりすることが考えられる。また、家庭とも連携を取っていく必要がある。

6. 結 論

「電話で話そう」の国語科の学習を通して、①どの生徒も課題に対して意欲的で、発表も積極的に行い、他の生徒の発表にも耳を傾けていた。②自分の生活に関係すると認識でき、興味や関心を持ったことで意欲的になった。③実際の携帯電話を持って話したり、通話アプリを活用したりしたことで意欲的に活動できた。④集団におけるコミュニケーションの場の中で発表できるようになり、教師や生徒からの賞賛によって意欲が高まった。これらにより、教師は①「伝わるように話そう」という生徒の気付きを導くように指導する。②対面での「聞くこと・話すこと」の学習に取り組むことも重視すべきである。③生徒の興味や関心や得意なことを見つけ、それらを授業の中に落とし込むことで、人間関係の交流を通して相手と会話をする楽しさを体験させる。④電話での対話力を培うために共感能力や内省力を高める取り組みをする。⑤生徒の現在及び将来の社会参加を目指して、生徒が電話を使用することができるようになるための指導・支援を探っていかなければならない。以上が考察された。

引用文献

- 1) 林田真一・松山郁夫 (2019) 自閉症・情緒障害特別支援学級の自立活動におけるストレングス視点からの授業実践:「ストロー竹とんぼを友だちと一緒に作り、飛ばして楽しもう」の取り組みを通して. 佐賀大学教育実践研究, (37), 99-111.
- 2) 福永颯ら (2005) 自閉症生徒における携帯電話の指導に関する研究—現実場面への般化を促す指導方略の検討—. 特殊教育学研究, 43(2), 119-129.
- 3) 石井哲夫 (1990) 受容的交流療法の立場から: VI 「自閉症に対するアプローチの統合は可能か」. 教育心理学年報, 30, 21-22.
- 4) 井上雅彦 (1994) 自閉症児における地域社会に根ざした教育方法の検討—「公衆電話で報告する行動」の獲得と頒価を目指して—. 兵庫教育大学障害児教育実践センター障害児教育実践研究, 2, 11-19.
- 5) 松山郁夫 (2018) 自閉スペクトラム症幼児へのソーシャルワーク実践モデルによる支援に対する保育を学ぶ学生の見解. 佐賀大学教育学部研究論文集, 2(2), 101-109.
- 6) 中島栄之介 (2019) 特別支援教育と不登校について: 「学業」「居場所」に対する特別支援教育の視点からの検討. 奈良学園大学紀要, 10, 109-112.
- 7) 濃添晋矢・大久保賢一・井上雅彦 (2002) 聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールの使用. 立命館大学大学院応用人間科学研究科修士論文.
- 8) Salee Bey, D. (2002) Strengths Perspective in Social Work Practice. Allyn and Bacon.
- 9) 山谷奈緒子 (2007) 自閉症児のコミュニケーション行動の変化について—情動的交流遊びを通して. 人間福祉研究, (10), 77-92.

参考文献

- 1) 特別支援学校学習指導要領各教科解説 (平成 29 年 4 月告示) 文部科学省
- 2) こくご☆☆☆ 特別支援学校中学部知的障害者用 (平成 30 年発行) 文部科学省

